防災・減災のページ

巡回ワークショップ　@相馬市・みなと保育園

震災発生直後を振り返った後、園児を対象にした避難訓練や防災教育について意見を出し合う保育士たち。避難場所への経路と、万が一の時に逃げ込む園舎の屋上も点検した

むすび塾

子どもへ継承 工夫必要

避難訓練と津波教育

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は7月23日、巡回ワークショップ「むすび塾」を相馬市のみなと保育園で開いた。東北以外の開催も含めて通算34回目。みなと保育園と系列の相馬保育園の保育士・調理師ら9人が、避難訓練や津波教育をテーマに意見交換した。

みなと保育園では震災発生後、津波が園庭まで迫り、保育士と園児は屋根に脚立を掛け、屋上に一時退避した。その後、園よりも高台にある市東部公民館に避難した。

参加者は「まさかこんなことが起こるとは想定していなかった」と震災当時の意識を証言。「揺れの後、子どもたちをおんぶして待機した」「真っ暗な中、何回も園と公民館を往復して食べ物や毛布を運んだ」と行動を振り返った。

今後の震災対策の一つとして避難訓練のアイデアを募ると、相馬保育園長の和田信智さん(28)は「乳児とほかの園児では生活のサイクルが違い、避難の際に必要な職員の人数も変わってくる。年齢別の避難訓練を行うべきではないか」と提案した。「公民館以外の避難先も考えた方がいいのでは」「予告なしでの避難訓練が必要」といった意見も出た。

進行役を務めた減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は「3月11日に起こったことが震災の全てではない。それだけを前提に考えては、対応を間違える可能性がある」と、被災体験がはらむリスクを指摘。津波避難は時間との勝負であることを説明し、避難路に置いてある荷物の撤去を求めた。

子どもたちに震災や津波について教えていくことも課題の一つ。副主任の斎藤真紀子さん(49)は「震災を経験した子どもは減っていく。目で見たり、体験したりして恐ろしさを知る取り組みが必要になる」と訴えた。

子どもたちが簡単に覚えられるよう「つなみ」3文字を頭文字にして「津波がくるぞ、難を逃れろ、みんなで声かけ高台へ」という合言葉を提案。他の参加者からは、紙芝居や語り部に体験を話してもらうなどの意見が出された。

震災後、園は防災用の備品をそろえ、園独自の「災害発生時対応マニュアル」も見直した。木村理事長は「震災の教訓を将来忘れないためにも、対策の一つ一つをマニュアルに書き込んでほしい」と要望した。

参加者は「職員であらためて意見交換したことはなかったので良い機会だった」「今日の提案を取り入れて、より一層、子どもたちを守れるようにしたい」などと感想を述べた。

震災後の対策

備品拡充など より多角的に

みなと保育園は震災後、さまざまな観点から防災対策を進めてきた。防災ずきんと、原発事故による放射能汚染に備える雨がっぱを全園児分用意。乳幼児を速やかに避難させるためのベビーカー、LED照明、サーチライト、非常用電源、普段はベンチとして使える担架などの防災備品を拡充した。

震災前から毎月実施していた地震訓練は、津波の発生も想定して見直しを図った。園児にずきんと雨がっぱをかぶせ、遊戯室に集めてから、裏門を通って高台にある相馬市東部公民館へと続く道まで歩く。保護者にも、非常時は公民館に避難すると伝え、引き渡しも避難場所で行う。

屋上への避難は「最後の手段」（みなと保育園）としつつ、装備を強化した。避難はしごがぐらつかないよう、固定具を4カ所設置。視察の受け入れ時などに訓練を兼ねて、職員がはしごを掛け、手順を確認している。

将来の災害に備えて用意した照明や非常用電源、複数の園児を運べるベビーカーなど

■むすび塾に参加して ――― 相馬市・みなと保育園

【震災発生当時の証言】 赤ちゃんは目を見開いて、おびえている様子だった。おぶれるだけおぶって脚立で屋上に逃げた。雨や雪が降り始め、ミルクを飲ませたり、お菓子を食べさせたりした。

＝みなと保育園保育士・高野智恵子さん㉟

【震災発生当時の証言】 休みだったが、園の様子を見に行った。その後、テレビで仙台空港に津波が到達したのを知った。相馬に来るとは考えず、海の近くの自宅に戻ろうとした。安全な避難のため、正確な情報の入手が大事だと思った。

＝みなと保育園調理師・久田幸枝さん(53)

【震災を経験して】 震災後、しばらくはつらさばかり感じていたが、今では20代のうちに経験して良かったと思うようになった。震災の教訓を、自分の子どもや保育園の子どもたちに伝えたい。

＝みなと保育園保育士・平岡実由貴さん㉗

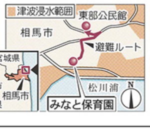
【避難訓練のアイデア】 園児の数が多いので一度には無理かもしれないが、年長組から、はしごを使って屋上に逃げる訓練を取り入れてはどうか。

＝みなと保育園保育士・佐藤トモ子さん㊼

相馬港中心に火発や工業団地

相馬市は浜通り地方北部に位置し、人口は7月1日現在3万6008。震災では484人が犠牲になり、住宅1819棟が全半壊した。

相馬港を中心に、相馬共同火力発電所や工業団地があり、工業が盛ん。古くから交通の要衝として栄え、国の重要無形民俗文化財「相馬野馬追」でも知られる。

松川浦は、ノリやアサリの養殖が行われ、潮干狩りや船釣りなども楽しめる漁業と観光の名所だったが、福島第1原発事故の影響により、漁の自粛が続く。現在は外洋での一部魚種の試験操業が行われている。